



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

1. モモ「白皇[®]」の収量確保を目的とした着果管理方法

[要約]

「白皇（岡山PEH7号）」は、最終着果数を既存品種の1.2倍にすることで、果梗内亀裂小果の多少に関わらず、既存の中生品種並かそれ以上の収量が確保でき、果実品質も大きく低下しない。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

本品種は、果梗内亀裂小果の発生がみられるため収量が不安定になりやすいが、障害の発生を抑制できる抜本的な対策技術は確立できていない。一方で、成熟時期が遅く、樹勢が強い本品種では、中生品種より着果密度を高めても果実品質に悪影響が生じにくいと考えられる。そこで、果梗内亀裂小果の発生を見込んで最終着果数を1.2倍程度にした場合の収量と果実品質に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 果梗内亀裂小果の発生率は、3%以下の年（2022年）や30%以上の年（2020年）があり、年次変動が非常に大きい（図1）。過去7年の平均は15.9%である。
2. 収量確保を目的とする場合の予備摘果は、満開20～25日後頃に結果枝の長さ20cmに1果程度とする。仕上げ摘果は、満開40～45日後頃に結果枝の長さ35cmに1果程度とする（表1）。
3. 収量確保を目的として、仕上げ摘果で1.2倍着果させると、慣行的な着果管理よりも収量が多く、「白鳳」及び「清水白桃」並かそれ以上の収量が得られる（図2）。
4. 収量確保を目的とする着果管理を行うと、果実重がやや小さく、糖度がやや低い傾向があるが販売等級の低下を生じるほどではない（表2）。
5. 慣行の約1.2倍着果させても、成熟期頃の葉果比は90～100枚程度となる（表2）。また、3年連続で行っても樹勢の低下は認められない（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本品種は、岡山県内のみで栽培可能で、県外へ苗木を供給していない。
2. 若木時は果実肥大が劣るため、成木期（6年生頃）に入ってから本技術を導入することが望ましい。
3. 摘果管理の時期は、平年値の目安であり、気象条件によって多少変動するため、果実の大きさなどを基準に開始時期を判断する。
4. 収量は樹冠占有面積を基準に10a当たり12本植えて試算した結果である。
5. 本試験は、「筑波5号」台木を用いた結果である。



[具体的データ]

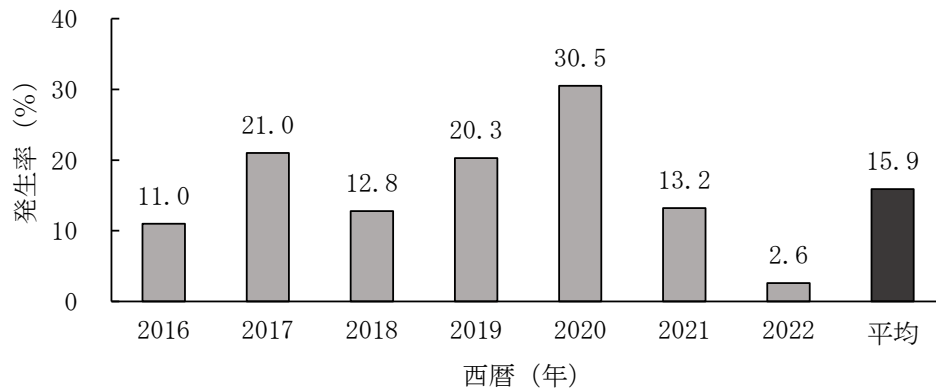


図1 「白皇」の果梗内亀裂小果の発生率（2016～2022年）

表1 「白皇」の収量確保のための着果管理方法

処理区	予備摘果 (満開20～25日後) ^z	仕上げ摘果 (満開40～45日後) ^z
収量確保区	結果枝の長さ20cmに1果程度 (最終着果数の2.0倍)	結果枝の長さ35cmに1果程度 (最終着果数の1.2倍)
慣行着果区		結果枝の長さ40cmに1果程度

^z 摘果時期は気象条件によって変動するため、予備摘果は果実の縦径15mm以上になった時点など果実の肥大状況等に合わせて調整する

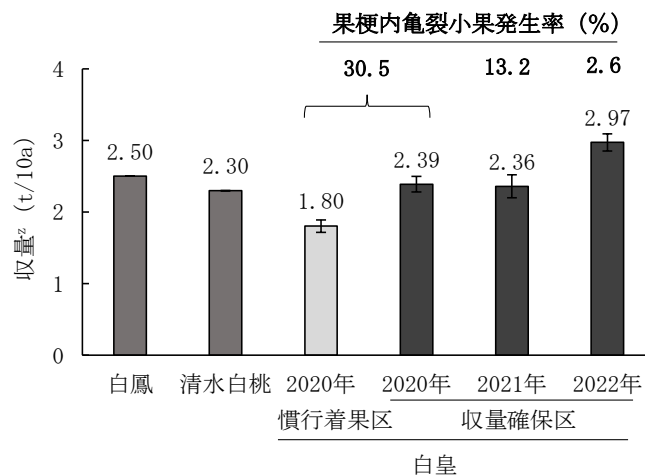


図2 着果管理方法の違いが「白皇」の収量に及ぼす影響

^z 「白皇」は樹冠占有面積を参考に10a当たり12本植えて試算し、「白鳳」及び「清水白桃」は経営指導指標に準じた

表2 着果管理方法の違いが「白皇」の果実重、糖度及び葉果比に及ぼす影響

処理区	西暦 (年)	果実重 (g)	糖度 ^z (° Brix)	葉果比 ^y (葉/果)
収量確保	2020	367	14.7	91.3
	2021	353	13.1	94.2
	2022	328	13.6	93.6
慣行着果	2020	378	15.1	125.7

^z 糖度は13度以上で最上位等級となる

^y 成熟前後（8月上旬から9月上旬）に調査し、果梗内亀裂小果を含む葉果比

[その他]

研究課題名：モモ新品種「白皇」、「白露」の高品質安定生産技術の開発

予算区分・研究期間：県単・令3～5年度

研究担当者：樋野友之、佐々木郁哉、吉村諒介、鶴木悠治郎、河村美菜子

関連情報等：1) 試験研究主要成果、平30 (17-18)、令3 (19-20、21-22)

2) 樋野ら(2019)園学研18別1:302